木の言い分㉓

■共生の理念

昨年10月14日、自然と人間の共生という地球規模の課題に貢献した人に贈られる第18回コスモス国際賞の授賞式が大阪で行われました。今回の受賞者はワシントン大学生物学部の名誉教授エステラ・レオポルド博士です。博士は花粉学者で自然保護論者として、父のアルド・レオポルド氏（「野生のうたが聞こえる」の著者）が唱えた「土地倫理」という考え方を受け継ぎ、人間が如何にして土地と調和して生きるかということを追及してきました。ここで言う土地とは単に地面ではなく、土壌や水、植物や動物などの生態系を含んだ共同体である「LAND」であり、その中で生きている私たち人間も生態学的な共同体の一員であり、自然と共生して初めて人間も生命をつないでいけるのだ、という考えに基づいて研究と実践を積み重ねてきました。博士は1927年生まれ、今年83歳になる女性ですが、今でも大学で研究を続けており、まさしく「自然と人間の共生」についての研究に生涯をかけておられます。車も自分で運転しお酒も強いという「すごいおばあさん」です。

普通、生物学的には共生はSymbiosisあるいはCommensalですが、1990年に開催された国際花と緑の博覧会の理念「自然と人間の共生」は、「Harmonious Coexistence between Nature and Mankind」と英語表記しています。共生を「Harmonious Coexistence」と訳し、「和して生きていく」という思想を表しています。

仏教の世界に共生（ともいき）という思想があり、単に「この世での生きものとの共生」ということだけではなく、「過去から未来へつながっている"いのち"との共生」だとしています。我々が今、持っている"いのち"は、はるか昔の祖先から綿々と伝えられているのと同時に、子や孫といった未来へとつながっていく"いのち"でもある。それは一人の"いのち"であって、一人の"いのち"ではない、過去から未来へつながっていく多くの"いのち"と共に生かされている。だから"いのち"は大切なのだ、と。

浄土宗では、この"いのち"のつながりを含めて「ともいき」と表現しています。私は浄土宗の信者ではありませんが、この極めて日本的とも言える発想が、これからの世の中には重要で、もっと世界に広めていく必要があるのではないかと思っています。

我々が未来へつなぐ手段として自然と人間との共生と言った場合、それは我々人類が地球の上で共に生かされていくために今何をなすべきかを考えることになるのでしょう。私たち「緑」に関わる者たちは、そのために「出来ることをする」ことを特に強く求められているのではないでしょうか。

この「共に生きる仲間たち」は何も大自然の中に行かなくても、都市の中、私たちの周りにも幾らでも居るということも再認識したいものです。

樹木医　大槻　憲章　（財）国際花と緑の博覧会記念協会